

## 研究ノート

# 日・韓両語における西欧語の影響 ——近代の小説を中心に——

尹 鎬 淑

1. はじめに
2. 言文一致
  - 2.1 日本語における言文一致
  - 2.2 韓国語における言文一致
3. 欧文脈
  - 3.1 語彙
  - 3.2 代名詞の多用
  - 3.3 主語の明確化による非情物及び抽象名詞の主語化
  - 3.4 比喩表現の発達
  - 3.5 接続詞
  - 3.6 句読点
4. まとめ

キーワード：西欧語、言文一致、欧文脈

### 1. はじめに

言語(の変遷)は歴史的、社会的変動に大きく影響される。言語の歴史的、社会的変動には自国内の事情のほか、外国の文化に接することにより、外国語がその要因として作用する場合が多い。日・韓両語も古くは漢字文化圏の中で漢語の影響を受けてきたが、近代以降門戸開放とともに西欧諸国との交流により西欧語の影響を受けるようになる。

西欧語が日本に入ったのは早くは室町時代である(佐藤 1972:306)が、明治以前には単語を取り入れるだけで、西欧的表現及び語法が入っ

たのは明治以降のことである。

明治以降の西欧文化の移入は、およそあらゆる分野で行われたが、特に言語の場合、近代思想を取り入れるに当たって、従来の日本的思考には存在しなかった意味や概念を表す言葉を、既存の漢語を使って表した、いわゆる訳語漢語の成立がある。

このように、西欧的表現の移入は、日本語の表現を豊富にしたばかりか、西欧との交流を通じて、近代文物や近代思想を受け入れた日本が、近代語の成立において西欧語の影響を受けるのは当然のことであろう。

一方、韓国語は、1894年甲午更張の改革を前後とし、日本を通じて西欧文物や西欧語が急速に流入してくる。また、新教育の実施、文学作品の翻訳、留学生の日本派遣等、直接・間接に準西欧化した日本との交渉により、日本語を通じた西欧語の流入も急増する。日本の植民地時代は、韓国で西欧の近代文物を受け入れ始めた時期であっただけに、韓国語における日本語の影響の増大は避けられなかった。

以上の点から、本稿では西欧の言語文化に接触して、最も大きな影響を受けたものとして挙げられる言文一致と、欧文脈を中心に西欧語の影響関係について考察する。

更に、近代文学史上注目される作家の小説を中心に簡述することにする。

## 2. 言文一致

### 2.1 日本語における言文一致

言文一致とは、話し言葉を基礎とする書き言葉を用いる文章様式で、近代以前の話し言葉と書き言葉とが異なる言文二途に対する文章である。

近代以前にも「デゴザル」調の翻訳文が行われていたが、一般の文章には及ばなかったため、それは普通、言文一致の起点とは考えられず、言文一致運動は、幕末の慶応2年(1866年)12月に提出された前島密の建白書「漢字御廃止之議」に始まるとするのが一般的である。その後、言文一致の文章が少しずつ書かれるようになり、明治19年頃から、二葉亭四迷や山田美妙等の小説家によって推進されていった。

本稿では山本(1965:33)に従って言文一致運動の形成過程及び特徴を検討する。

先ず、第一期(発生期、慶応2年(1866)～明治16年(1883))は、言文一致の創造期とも言われ、前島が「漢字御廃止之議」の中で、「ツカマツル」、「ゴザル」等の文末語を用いることを主張した後、「デゴザル」体を試みようとする文章が現れた時期である。しかし、この期の言文一致はまだ一部の人々の間に行われた特殊なもので、一般的なものとは言えず、従って、文末語に新旧両要素の混在が見られる。

- (1)君牛肉は至極御好物とするさつのウ仕るが僕  
なども誠実賞味いたすでござる(『安愚楽鍋』:141)
- (2)…彼所を道くわん山とつけたのはむかし太田  
道灌といふ人が城を築いた場だからサ。(同上:  
151)

次に、第二期(第一自覚期、明治17年(1884)～明治22年(1889))は、山本(1965:45)によれば約30名の言文一致小説作者を出して、小説界に言文一致時代が現出したが、明確な文体革命の意識をもった言文一致体小説の着手は、明治

20年から明治22年にかけて、二葉亭四迷の発表した『浮雲』に見られる。しかし、『浮雲』で行われた言文一致は、整った形式のものではなく、初めのうちは、形容動詞止め、名詞止め等、江戸作品に見られる文末形式も混用されている。

- (3)さては老巧しても流石はまだ職に堪へるもの  
か、しかし日本服でも勤められお手軽なお身の上、  
さりとはまたお氣の毒な。(『浮雲』:151)
- (4)日曜日は近頃に無い天下晴れ、風も穏かで塵  
も起たず、歴を繰て見れば、歴で菊月初旬とい  
ふ十一月二日の事ゆゑ、物観遊山には持て来い  
と云ふ日和。(同上:175)

しかし、『浮雲』の影響を受け、多くの小説家の努力によって言文一致は次第に発達し、二葉亭の「だ」調以外に、美妙の「です」調、嵯峨の「であります」調、尾崎の「である」調等が用いられるようになる。特に尾崎の場合、最初は西鶴ばりの文章表現を使っていたが、後「多情多恨」、「青葡萄」等では「である」調の言文一致の文章が見られる。

- (5)たれ言ふと無く傳へる此聲、こころ細さは増  
すばかりです。新中納言(知盛)の顔を見るさへ  
涙です。(『蝴蝶』:243)
- (6)…而して其休暇中を我家で送らうと、今故郷  
へ歸るのであります。(『野末の菊』:274)
- (7)凡そ天下に小癩に障るものは、近來後進とか  
稱へる修行中の小説家である。(『青葡萄』:211)

江戸時代までは文末形式に「なり」、「たり」、「けり」、「べし」等が使われていたが、明治になって人に話して聞かせるための文章の平易化への一環として、演説や問答体文章などで「でござる」が用いられた。その後、明治6、7年頃に「でござる」調または「ます」調の流行期を迎える(木坂 1992:188)。また、(5)の「で

す」は、江戸語では芸者等、まだ一部の人の間で使われた特殊な位相語であったが、明治の初めから次第に広がり、現代語のように広く使われるようになるのは明治20年以降である。更に(6)の「であります」も江戸では使われていなかったが、明治の初めに諸国の方言に由来して使われるようになった語である。これは後に専ら書き言葉に用いられるようになった。(7)の「である」は、長崎のオランダ商館長のゾーフが長崎の蘭通詞と共同で編んだ蘭和辞書『道訳法爾馬(ゾーフハルマ)』の例文の訳文に多く見られる(山本 1964:106)。このように文末表現が次第に整えられて、近代口語文体が確立、普及するのは作家たちの口語文体創始の実験によるものであるが、これが体系づけられるのは第六期(明治43～大正11)になってからである。

明治22年からの第三期には、言文一致の停滞期を迎え、西鶴ばりの雅俗折衷体や非言文一致の和漢洋俗による折衷的新文体が用いられる混沌期に入る。代表的作品としては、幸田露伴の『五重塔』(1892)、樋口一葉の『十三夜』(1895)、尾崎紅葉の『金色夜叉』(1897)等がある。

(8)一ツの工事に二人の番匠、此にも爲せし彼にも爲せし、那箇にせんと上人も流石これには迷はれける。(『五重塔』:209)

(9)…瓶にさしたる薄の穂の招く手振りも哀れなる夜なり。(『十三夜』:249)

(10)彼は強ひて宮を慰めんと試みつ。兼ねては自ら慰むるなるべし。(『金色夜叉』:21)

第四期(明治28～明治32)の「第二自覚期」は、雅俗折衷体の作家尾崎紅葉の言文一致採用が目立つ。紅葉は「である」調で、『多情多恨』、『青葡萄』等を書いたが、これが第二の言文一致意識の導火線になる。

(11)之を聞くと…思はず笑つたのである。(『多情

多恨』:108)

(12)それが確かに苦笑と見えたばかりではない、苦笑であった。(『青葡萄』:208)

一方、第五期の確立期は、言文一致運動が最高潮に達し、島崎藤村の『破戒』(1906)、田山花袋の『蒲団』(1907)等の自然主義小説や、夏目漱石の『吾輩は猫である』(1905)と森鷗外の『雁』等の反自然主義小説の出現によって、言文一致体が確立されるに至るのである。

(13)ところが昨日に限つては持たなかつた。時刻に成つても歸らない。(『破戒』:73)

(14)それであるのに、二三日來の此の出來事、此から考へると、女は確かにその感情を偽り賣つたのだ。(『蒲団』:31)

(15)だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。(『吾輩は猫である』:98)

(16)僕は腹の中で思つた。こつちもぼんやりしてゐたが、岡田も矢つ張ぼんやりしてゐたやうだ。(『雁』:120)

山本(1965:48)によれば、特にこの期は小説だけでなく教育上でも言文一致の方針が確立した時期で、全国連合教育会で『小学校の教科の文章は言文一致の方針によること』の議案が提出され満場一致で可決されたことは特筆すべきことである。一方、新聞や雑誌等には第六期の明治43年以降にようやく言文一致の文章が出現する。また、近代の言文一致が最も遅れて行われた官庁の公用文や法令文では、第七期大正12年(1923)になって完成する。

第六期の言文一致の完成期の代表的な作家には、白樺派の武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉等がいるが、彼らは細部の表現にいたるまで、欧文脈の要素を取り入れて言文一致を確立させる。小説における言文一致文体は第六期に完成するのである。以下は白樺派の作家たちの言文

一致の文章である。

(17) 勇士勇士！自分は勇士だ！かう心に叫んだ。

(『お目でたき人』:16)

(18) 又さう思ふと葉子は襟元に凍つた針でも刺さ

れるやうに、ぞくぞくとわけの分らない身慄ひ  
をした。(『或る女』:25)

(19) そして、睫毛が風に吹き倒されるので眼がか

ゆくなった。(『暗夜行路』:48)

## 2.2 韓国語における言文一致

韓国の「新小説」の嚆矢と言われる李人植の『血の涙』が発表されたのは1906年であるが、下例のように、まだ言文一致にはなっておらず、旧小説と新小説の形式が同時に見られる。

(20) 꿈에는 팔월추석인데 일년 제일가는 명절이  
라고 와글와글 하는 중이라。(『血の涙』:8)

/kkwumeynun phalwelchwusekintey ilnyen  
ceyilkunan myengcelilako wakulwakul hanun  
cwungila/

夢の中ではお盆で一年中一番の年中行事とかで  
賑やかなさなかである。

(21) 정상부인의 얼굴이 희기는 하나 청기가돈다。

(同上:37)

/cengsangpwuinuy elkwuli huykinun hana  
chengkika tonta/

チョンサン夫人の顔色は白いが青白さを帯びて  
いる。

(20)の「이라/ila/」は旧小説に見られる  
文末語尾であるが、『血の涙』では、この他に  
も、「지라/cila/」、「더라/tela/」、「로라/  
lola/」、「더나/tenya/」等の旧文末語尾が  
使われており、新小説の文末語尾としては「다  
/ta/」だけが見られる。元々近代以前の韓国  
語における文末語尾は上に挙げた叙述形以外に  
「(이)나/(i)nya/」、「(이)나/(i)nka/」、

「아라/ala/」、「리오/lio/」等の疑問形、  
命令形、感嘆形語尾まで含め、非常に多様であっ  
たが、日本語の「だ(である)」の影響で単一の  
形式に収れんする。이오덕(1990:66)は、「日本  
語の影響による一種類の文末語尾に比して古来  
の文末語尾は多様な面白さを感じさせる文章で  
ある」(日本語訳は筆者による)と述べ、近代以  
降単一化した文末語尾に対して批判的である。

一方、「新小説」という用語は、李人植の  
『血の涙』が発表された次の年(1907)に、ある  
雑誌の発売広告を通じて旧小説の代置語として  
使用された用語で、韓国だけに見られる独特の  
名称である。この「新小説」は普通1900年代か  
ら1920年代までの過渡期の小説を指す。「新小  
説」の特徴としては、叙述の平易性、文章冒頭  
の破格の変形、写実的描写等が挙げられる(김  
윤식 1996:47)が、先の例でも分かるように、  
『血の涙』は、まだ形式面では近代の小説のよ  
うな言文一致、西歐的表現様式等の要素が確立  
されておらず、近代以前の旧小説の要素を内包  
している。

韓国で言文一致の最初の著書として史的価値  
が高いのは、李光洙が1917年に発表した『無情』  
である。『無情』は韓国の最初の近代小説で、  
『無情』に至ってようやく近代小説的要素が完  
成したとされている。しかし、前半部には「이  
라/ila/」、「리라/lila/」等の旧小説の文末  
語尾が見られ、完全な言文一致の文章になるの  
は小説の後半部からである。

(22) 형식은 처녀를 대할 때에 누이라고밖에 더  
생각할 줄을 모르는 사람이라。(『無情』:16)

/hyengsikun chenyelul tayhal ttayey  
nwuilakopakkey te sayngkakhal cwulul  
molunun salamila/

ヒョンシクは若い娘に接する時でも妹としか考  
えない人である。

(23) 형식은 생각하였다。저들도 사람이다。(同上:

234)

/hyengsikun sayngkakhayessta.cetulto  
salamita/

ヒョンシクは思った。彼らも人間なのだ。

また、李光洙は日本への留学経験を持つ作家で、氏の作品の中には(24)のような日本語の転移使用と(25)のような日本語式表現が多い。特に(26)では動詞の名詞形と「～の」の乱用が見られるが、この点からも李光洙の言文一致文には日本語の影響が大きかったと推察される。

(24)저편 히사시가미가 내 이마에 스칠 때도 있었  
었다。(『無情』:2)

/cephyen hisasikamika nay imaey suchil  
ttayto issulyessta/

向こうのひさし髪が私の額を掠める時もあるだ  
ろう。

(25)영채가 정절이 깨어짐을 위하여 목숨을 버리  
려함은 효와 정절이라는 일 도덕률을 인생인  
여자의 생명(life)의 전체로 오인(誤認)한 것이  
라 하였다。(同上:209)

/yengchayka cengcenli kkayecimul wihaye  
mokswumul pelilyehamun hyowa  
cengcelilanun il toteklyulul insayngin  
yecaury sayngmyenguy cenchaylo oinhan  
kesila hayessta/

ヨンチェが貞節を失くした(貞節の喪失)のため  
命を捨てるようとしたのは孝と貞節というものや、  
いわゆる道德こそ人生であり女の命のすべてで  
あると誤認したゆえであったという。

この他にも言文一致の文章を完成した作家として金東仁が挙げられる。一般に、金東仁は、過去形文末表現「았(었)다/ass(ess)ta/だった」を韓国語で最初に用いたと言われている。李光洙の作品が主に現在形「(이)다/(i)ta/だ」で書かれているのに対して、金東仁は主と

して過去形「았(었)다/ass(ess)ta/だった」  
を用いている。

(26)복녀는 열아홉살이었었다。(『감자』:6)

/poknyenun yelahopsaliessessta/

ボクニョは十九才だった。

(27)M은 학생시대부터 대단한 방탕생활을 하  
였습니다。(『발가락이뒹었다』:52)

/emun haksayngsitaypwute taytanhan  
pangthangsayghwalul hayesssupnita/

Mは学生時代から大変ふしだらな生活を送  
ったのでありました。

しかし、(26)のように金東仁の初期の作品には過去完了形が乱用されている。(26)の「이었었다/iessessta/」の正しい表現は「이었다/iessta/」であるが、これは(27)のように後期の作品では正しく表現されている。このように金東仁が創案したという過去形文末語尾も日本語の影響によるが、これは氏が日本に留学した経験を持つこと、作品の中に次のように日本語の転移使用が多数使用されている点からも推測できるのである。

(28)그의 사건은 소설화하여 타치키리로 세회를  
연하여 게재되었습니다。(『딸의업을이으려』:1  
48)

/kuuy sakenun soselhwahaye tatikhililo  
seyhoylul yenhaye keycaytoyesssupnita/  
彼の事件は小説化されタチキリで三回続けて掲  
載されました。

(29)고환을 오까사레루 하지 않으면 괜찮어。  
(『발가락이뒹었다』:51)

/kohwanul okkasalelru haci anhumyen  
kwaynchanhe/

睾丸を冒されていなければ大丈夫だよ。

日本語においても小説の文章に過去形として

の「た」体が多くなるのは、近代以後西欧語翻訳の影響である(中村 1982:88)ので、韓国語における過去形文末語尾使用は日本語を通じた西欧語の間接的な影響だと言える。

以上のように、韓国語での言文一致は1920年代になってから実現するが、これは山本(1965)の言文一致による時代区分に当てはめると第六期後半に相当し、韓国語における言文一致文章が、日本語よりかなり遅れていることが分かる。但し、文学における近代語化が外国に留学した作家によって完成されたのは日本語と同様であるが、日本の作家が西欧諸国に留学して西欧語の影響を直接受けるのに対して、韓国の場合、作家が日本に留学して間接的に受けたことが異なる点である。

### 3. 欧文脈

欧文脈とは、日本語文章脈に欧文的要素が混入または融合することによって独特の文章脈を形づくるときの、一定の表現事象を言う。木坂(1988:386)によると、欧文脈は、外来語のように、意味するものの直接的複写的導入としてではなく、原語が一度翻訳という操作を通じて、日本語の意味するものの形式に変換された形で導入されることを指すが、韓国語では、欧文脈という用語は存せず、「外来語」が「欧文脈」の意味としても使われる場合が多い。本稿では、代表的なものをとりあげて、それが近代の小説の中にどのように用いられているかを検討する。

#### 3.1 語彙

明治以降、日本語には西欧語から多くの外来語が新たに加わったが、西欧語の翻訳過程で新しく作られた「新文明語彙」も少なくない。このようにして作られた語彙には漢語が多いため、伝統的な日本語の語彙に自然に同化融合して何ら異和感なく現代日本語に受け継がれることに

なる。

(30)お勢の何時になく眼鏡を外して頸巾を取つて  
るを怪むで…(『浮雲』:156)

(31)昔は海邊四五町の漁師町でわづかに活計を立  
てて居た。(『武蔵野』:235)

(32)誠に女は男にとって「永遠の<sup>エターナル・アイドル</sup>偶像」であ  
る。(『お目でたき人』:7)

(33)女学生もさうハイカラなのが澤山居ない。  
(『蒲団』:34)

(34)猛獣が人に馴れるやうに、意識せずに一種の  
culture(キユルチュウル)を受けてゐるのである。  
(『雁』:105)

上例(30)、(31)、(32)は、漢語語彙で訳語を立てた場合であるが、(33)、(34)のように訳語を立て得なかった場合は、(33)のように原語そのままをカタカナ表記で用いるか、(34)のように原語をアルファベット表記することが多い。原語のアルファベット表記は江湖山(1964:140)の言うように、外国語や外来語の意識を、視覚の面で効果的に読み手に働きかける効果もあろうが、新文明語彙が日本語化するのに一定の時間がかかったという側面も存するように思われる。

次いで、この日本式翻訳漢語語彙は韓国語にも入って定着するが、この非伝統的な漢語語彙が韓国語に受容されたのは、1876年の韓日修好条約に始まる。しかし、数的には多くなく、幅広く見られるようになるのは甲午更張(1894)以降である(宋敏 1989:71)。このように日本語から韓国語に受容された西欧式抽象概念に対する翻訳語彙は、殆どが漢字語であったため、日本語からの借用にも関わらず、大きな抵抗もなく近代韓国語に根を下ろすことができたように思われる。

(35)…峰山등을 넘어 鐵骨電線柱가 늘어섰다. 그

러나 … 이 村落에 葉書 한장을…(『倦怠』:236)  
 /phalpongsantungul neme chelkolcensencwuka  
 nulesessta.kulena …i chonlakey yepse  
 hancangul/

八峰山等を越えると鉄骨電線柱が立っていた。  
 だが…この村に葉書一枚を…

(36)여자의 트렁크는 蓄音機다。(『興行物天使』:  
 67)

/yecaury thulengkahunun chwukumkita/  
 女のトランクは蓄音機である。

(37)그런데, 언제 엥게지먼트를 하였는가。(『無  
 情』:4)

/kulentey encey eyngkeycimeynthulul  
 hayessnunka/

なのにいつエンゲージメントをしたのか。

(38)여보게. 자네 이런 기모찌 알겠나…(『발가락  
 이뒹었다』:65)

/yepokey.caney ilen kimocci alkeyssna?/  
 ちょっと君、こんな気持ち分かるかい?

上例でも分かるように、韓国語も日本語と同様、その形式において漢語語彙で訳語を立てたもの(例(35))と日本語化した外来語(例(36))や原語そのままを韓国語表記したもの(例(37))とがある。日本語のように原語のアルファベット表記は用いられず、例(38)のように日本語原語の韓国語表記が多数見られる。

江湖山(1964)が指摘するように、原語をそのまま用いることは(38)のように近代化された認識を視覚的に表す効果として有効であると思われる。しかし、西欧語の流入が短期間に行われたため、新たな近代的思想が近代韓国語の語彙では表現しきれなかったことも原因であろう。この点からも、韓国語の漢字語彙体系に及ぼした日本語の影響は著しいと言えるだろう。

### 3.2 代名詞の多用

欧文脈の要素としてよく論議されている代名

詞としては、「彼」、「彼女」の使用がある。近代以前には、第三の人物を指す場合、固有名詞をもって表現したが、西欧語の導入以来「彼」、「彼女」等の第三人称の代名詞が多く使われるようになった。しかし、両語が定着するまでにはある程度の時間がかかったようで、近代の代表的な翻訳作品である二葉亭の『あひびき』(明治21)と『めぐりあひ』(明治21~22)には、これらの表現は見られず、固有名詞を使うか、「少女」、「男」等の普通名詞を使っているが、明治28年に発表された紅葉の『青葡萄』と明治30年から明治36年に書かれた『金色夜叉』には「かれ(彼、渠)」の例が下例のように相当数用いられている。

(39)さて渠を入口の一室に導いて、三たび、何だ、と訊ねた。(『青葡萄』:207)

(40)其の行く時彼の姿は恰も左の半面を見せて、(『金色夜叉』:7)

しかし、「彼女」は使用されず、「妻」等の普通名詞か、固有名詞が用いられている点から、「彼」のほうが「彼女」に先行して用いられたことが分かる。また「彼女」のかわりに「かの女」という代名詞が見られる。

(41)師と一緒にゐた友と、師に家をかしてゐた友と、かの女がおとづれた。(『幸福者』:77)

(42)自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、(『蒲団』:31)

その後、以下の例のように、明治40年代の作品にも「彼」、「彼女」の例が見られるが、目立って多く使われるのは大正時代からである。

(43)彼女はとらはれてゐる女であらう。(『お目でたき人』:20)

(44)彼は顔中の血が一時に頭の中に飛び退いたや

うに思った。(『カインの末裔』:271)

(45)髪は其頃でも少し流行らなくなった、舊式な所謂廂髪で、彼は初めて彼女を見た時どんな髪をして…(『暗夜行路』:112)

木坂(1988:389)は、訳語「彼」、「彼女」によって、代名詞語彙の分野が拡大しただけでなく、主語や目的語明示の西欧的名詞型構文をも移すことになること述べているが、「it」の訳語からきた代名詞「それ」の使用も目立つ。

(46)衣透姫に小町の衣を懸けたといふ文三の品題は、それは惚れた慾眼の最負沙汰かも知れないが、(『浮雲』:162)

(47)それは權威ある人間だ。(『幸福者』:57)

韓国語でも、日本語と同様、西欧語による代名詞の多様化が見られ、特に第三人称の代名詞の変化が目立つが、「그/ku/彼」を、作品の全般にわたって使い始めたのは金東仁である。しかし、男女両方に混用しているため、混同されやすい。下例(48)でも、前者は「복녀/poknye/ポクニョ」で、後者は「복녀의 남편/poknyeuy namphyen/ポクニョの夫」を指すにも関わらず「그/ku/彼」を使ったため、意味的に理解しにくい傾向がある。また(49)のように女性を指す第三人称代名詞として「저사람/cesalam/あの人」という言葉を使って、さらに「자기의안해/cakiuyanhay/自分の妻」という説明を付けている。これをみても「그/ku/彼」、「그녀/kunye/彼女」の定着がどれほど難しかったか分かるであろう。

(48)그동리사녀인들의 보통하는 일을 본받아서 그도…별수가 있었지만, 선비의 집안에서 자라난 그는 그런 일은 할수가 없었다。(『감자』:6)  
/kutonglisnyeintuluy pothonghanun ilul ponpatese kuto… pelswuka issessciman

senpiuy cipaneysey calanan kunun kulen ilun halswuka epsessta/

その村の女達の普段やっていることを見習い彼女も…稼ぐことはできるが、士人の家門で育った彼女はそんな仕事をやるわけにはいかなかった。

(49)내게 만약 생식능력이 없다면 저사람(자기의안해)이 불상하지 않나。(『발가락이닭었다』:61)

/naykey banyak sayngsiknunglyeki epstamyen cesalam(cakiuyanhay)i pwulsanghaci anhna/

私にも生殖の能力がないとすればあの人(自分の妻)が可哀想じゃないか。

また、韓国語では、第三人称代名詞「그/ku/彼」が1920年代から用いられているのに対して、「그녀/kunye/彼女」は近代の小説では一例も採集されず、女性を指す場合、男性三人称代名詞「그/ku/彼」で代用するか、普通名詞や固有名詞を使うことが多かった。しかし、近代の翻訳小説や新聞によると、1930年代に「그녀자/kunyeoca/彼の女」が使われはじめ、1940年代以降広く用いられるようになったと考えられる。이오덕(1990:74)は、「그/ku/彼」、「그녀/kunye/彼女」の使用も韓国語に固有の多様な名詞体系を汚したと述べ、これも日本語からの悪影響だと主張している。この他に、日本語と同じく英語の非人称主語‘it’の翻訳語である「그것/kukes/それ又はあれ」が用いられているが、韓国語としては生硬で、その使用頻度は日本語ほど高くない。

(50)「어죽노리」그것은 살림사리의 한 단편의 축도에 닮았었다。(『눈을겨우들때』:100)

/「ecwuknoli」kukesun sallimsaliuy han tanphyenyu chwuktoey talumepsessta/

「オジュクノリ」それは生活の一面の縮図に違



いなかった。

(51) 나와 將棋둔다는 것 그것부터가 倦怠다。

(『倦怠』:232)

/nawa changkitwuntanun kes kukespwutheka  
kwentayta/

私と将棋を指すということそれ自体が倦怠である。

### 3.3 主語の明確化による非情物及び抽象名詞の主語化

近代日本語では、近代以前に比べて主語を明確に表す傾向が著しい。この傾向に従って、前に挙げた代名詞の発達のほか、非情物及び抽象名詞の主語化が目立つ。日本語では元来主語は有情物で、擬人的な用法を除き原則として人である場合が多い。しかし、近代以降、西欧的表現の流入によって、具体的、論理的、分析的な表現になるにつれて、有情物だけでなく非情物を主語として立てる場合が多くなり、抽象名詞(句)まで使われるようになる。

(52)塵一つすゑずにきちんと掃除が届いてゐて、

三ヶ所に置かれた鐵瓶から立つ湯氣で部屋の中  
は軟かく暖まつてゐた。(『或る女』:95)

(53)容貌は其持主を何人にも推薦する。(『雁』:92)

一方、近代以前の韓国語も有情物主語が殆どで、先に述べた日本語と同様、近代以前に用いられている非情物主語は、大体、自然現象や身体、言葉、名前等、人間と関係あるものが多い(尹 1996)。

しかし、非情物や抽象名詞の主語使用は、近代以降西欧語の論理的、分析的、客観的表現の影響で、急増するようになる。そのため、主語が明確になっているが、(54)のように韓国語としては不自然に感じられる場合もある。このような生硬で、耳慣れない直訳調の文章が西欧語の流入を批判的に考えさせた原因になるのであ

らう。

(54)아까 녀학생들에게 비웃기때와는 온전히 다른 외로움이 그를 괴롭게 하였다。(『눈을겨우 뜰때』:77)

/akka nyehaksayngtuleykey

piwuskinttaywanun oncenhi talun oylowumi  
kulul koylopkey hayessta/

さっき女学生達にからかわれた時とはまったく違う淋しさが彼を苦しめた。

### 3.4 比喩表現の発達

抽象名詞(句)が主語として使用されることによって、日本語の表現は多様化するが、以前には表現できなかった細部の表現が可能になることで作家達の作品活動も活発になり、表現手法も西欧の修辭法を生かして多様になる。しかし、西歐式の比喩表現に心酔したあまり、下例のように、初期には翻訳臭の強い表現が目立つ。これは歐文脈の直訳的言い回しの影響であると思われる。

(55)「まさか殺されは爲まい」の推察が蟲の息で生きてゐる。それなのに涙腺は無理に門を開けさせられて熱い水の堰をかよはせた。(『武蔵野』:240)

さて、韓国語においても近代以降、比喩表現の発達が見られる。古来韓国語でも比喩表現は用いられていたが、誇張法や直喩法等、その表現技法は類型的であった。

(56)청년의벽벽이일신을비이치는데눈뜬빙의의역러 진듯일천жат누위가삼의썩노니(『仁顯王侯傳』:248)

/chengthyenuy pyeknyeki ilsinul  
piichinantus nopun pingayuy ttelecintus  
ilcen casnapwi kasamuy ttwinoni/

青天霹靂がこの身に砕けるように、高い氷の崖から落ちるように、一千匹の猿が胸の中で飛び遊ぶ。

これらに加えて、近代小説では、次のように合理的、客観的描写に基づいた細密な描写技法が使われる。しかし、日本語の場合と同じく、西欧語直訳調の表現が頻用されているため、自然な韓国語に感じられない傾向がある。

(57)굿 추녀끝에 걸린듯한 뜨거운 해는 그침없이 더위를 보낸다。(『笞刑』:23)

/kos chwunyekkuthey kellintushan ttukewun haynun kuchimepsi tewilul ponaynta/  
軒先にかかるような熱い太陽は限りない熱さを  
おくる。

### 3.5 接続詞

近代語の成立における西欧語の影響の中で最も大きかったものは、論理性と客観性の導入と言える。時枝(1950:144)によると、この論理的・客観的文章の展開に重要な役割を果すのは接続詞である。本稿では、近代以前からある程度用いられていた接続助詞と動詞の連用中止形は対象から外し、時枝(1950:137-150)が認めた55種類の接続詞だけを考察した。その結果、近代以降、近代以前に比べてその頻度や語種が多くなったことが分かる。近代を通して用いられる接続詞として、「しかし」、「そして」、「けれども」、「また」等があるが、これらの接続詞には作品によって特に頻度の高いものがある。例えば、『浮雲』は「さて」、『蒲団』は「けれども」、『お目出たき人』は「しかし」、『或る女』は「而して(そして)」が多く使われている。また、明治期には、「されど」、「然るに」等の文語接続詞が見られるが、大正・昭和期と時代が下がるにつれて「従って」、「だから」等の新たな接続詞が登場することが分かる。尚、

(58)…ラヴの爲に一身上の希望を捨ててはつまらないと思つて、それであきらめたのかと思つたら、正反對だつたんだね。(『田舎教師』:133)

のように、接続助詞と接続詞を二重に使うことによって翻訳臭を感じさせるものもある。

一方、韓国語の場合も、近代以降接続詞の発達が見られ、近代韓国語の文脈にも重要な役割を担っている。しかし、韓国語では、接続語の頻用が問題とされ、金正右(1994)も接続語の重複使用によって不自然な表現になることを指摘している。文が短く、接続詞の少ない文章は、余裕に乏しい感じがし、それが古めかしい印象をもたらすことがあると言われるが、過度の接続詞の使用も文章を繁雑にする。下例(59)も一つの文に接続詞や接続助詞が重なって用いられており、だらだらと続く感じがするため、省略したほうが自然な表現になる。このような接続助詞と接続詞の重複使用は、近代の代表作品に多数見られるが、これも先程述べたように日本語の影響であり、近代韓国語における外国語の影響を否定的に考えさせる原因になる。

(59)내가 다 먹고 물러섰을 때 그릇을 와서 챙기는데…그런데 난 깜짝놀라지 않았느냐。(『봄봄』:117)

/nayka ta mekko mwullesessul ttay kulusul wase chayngkinuntey,kulentey nan kkamccaknollaci anhassnunya/  
私が食べおわって引き下がった時に来て器を片づけるのに、なのに私はびっくりしたんじゃないか。

### 3.6 句読点

山本(1965:11)は、「欧文の各種の文章符号を移入し、句読法を確立したことは、近代の文章をどんなに読みやすく分かりやすいものにし、合理的で細叙に堪えるものにしたか知れない」

と述べ、句読点を始め、各種の文章符号の移入を、近代文体の要件の一つとしているが、この文章符号の確立こそ近代の文章構成上欠かせないものだと言える。日本語において「、！？〇」「『』—=…」等の、欧文符号が出現したのは大体明治十年頃からであるが、それらを多少改良した多くの新符号が定着を見たのは明治20年以降である。また、39年に国定教科書修正の標準とする目的で、文部大臣官房図書課『句読法案』が作成され、文部省からその後数回にわたって句読法に関する文書が発表され、句読点が確立されるようになる(宇野 1964:42)。

しかし、最初は句読点の打ち方の標準が明確でなかったため、句読点が不自然な例も少なくなく、読点が頻用されているものも多く見られる。

(60)演劇の不利は、ひとり上にのぶる所のもの  
みにあらず、別に人間の性質のうちには、演ず  
可らざるものあり、又演ずとも興なきものあり。  
(『小説神髓』:89)

(61)宮の軀の横りし處も、又は己の追來し筋も、  
彼處よ、此處よと、陰に一々指しては、限無く  
駭けるなり。(『金色夜叉』:136)

このような句読点の用い方は(62)のように明治40年代頃までの小説にも見られる。また、文章符号の使用には作家個人の好みが強ク関係するようで、擬古文派の作品には句読点以外の文章符号が殆どないのに対して、白樺派の作品には、(63)のように「?!…」等、欧文符号が頻用されている。これは欧文脈を積極的に取り入れようという当時の姿勢を反映していると言えるが、これら文章符号が完全な定着をみるのは大正期に入ってからのことである。

(62)自分は彼等を祝しようと思ふ、しかし面前に  
見る時ややもすると呪ひたくなる。(『お目た

き人』:5)

(63)「何?あなた見た?……おおさうさう……こ  
れは寝呆け返つとるぞ、はははは」(『或る女』:  
77)

一方、韓国語も本来句読点等、文章符号を持たず、近代以降に日本語を通して受け入れるようになるのだが、韓国語では日本語の場合よりも句読点の打ち方がおかしい場合が多い。下例(64)も文末に句点がなく、(65)は読点の打ち方が不自然である。また(66)では句点の用いられるべきところに読点が使用されている。韓国語では句読点が定着して適切に使われるまでに日本語の場合よりも更に時間を要したのである。

(64)그리고 난 사람의 키가 무럭무럭 자라는줄만  
알았지 불박이 키에 모로만 벌어지는 몸도 있  
는 것을 누가 알았으랴 (『봄봄』:110)

/kuliko nan salamuy khika mwulekmwulek  
calanun cwulman alassci pwuthpaki khiey  
moloman pelecinun momto issnun kesul  
nwuka alassulya/

それから私は人の背はすくすくと高くなるとば  
かり思っていて、そんなに伸びずに横ばかりに  
広がる体があることを誰が想像出来たのだろう。

(65)복녀는,원래 가난은 하나마 정직한 농가에서,  
규칙있게 자라난 처녀였었다。(『감자』:3)

/poknyenun,wenlay kananun hanama  
cengcikhnan nongkaeysey,kyuchikissey  
calanan chenyeessessta/

ポクニョはもともと貧しいけれども、正直な農  
家で正しく育った乙女だった。

(66)웨 요전에 삼포말서 산에 불 좀 놓았다구 징  
역 간거 못봤나, 제산에 불을놓아두…죄가 얼  
마나 더 중한가。(『봄봄』:121)

/wey yoceny samphomalse saney pwul com  
nohasstakwu cingyekkanke mospwassna,  
ceysaney pwulul nohatwu… coyka elmana

te cwunghanka/

なんかこの間サンボ村で山火事を起こしたとして懲役に行ったのを見てないか、自分の山に火事を起こしても…罪がどれほど深いといえるのか。

読点は近代全作品を通してそれ程多くなく、日本語に比べると非常に少ない。例えば、これは羅彬の『물레방아』のように作品を通して読点があた一つしか用いられていないものを見ても、日本の『あひびき』とこれを重訳した韓国語の『密会』とを比較して見ても分かることである。『あひびき』では読点が361回使われているのに対して、『密会』の場合は僅か11回に止まる。

韓国語が読点を多く使わない理由として、日本語にない分かち書きが存することが考えられる。

このように、韓国語の場合、西欧語の影響は殆どが日本語を通してのものであるが、分かち書きだけは、英語から直接影響を受けている。近代韓国語の小説に見られる欧文式符号には、句読点のほか、「」『』一？！…○等、日本語の場合とほぼ同じであるが、頻度は日本語ほど高くない。また、句点の場合、現代語では「。」とすところに「。」が使われているが、これも日本語の影響であると思われる。1945年に日本から独立した後は、日本語に代わって英語の影響を直接受けるようになり、句点も「。」から「.」に変わったのである。

#### 4. まとめ

以上、近代日本語における西欧語の影響について考察し、また、これが近代の韓国語にどのように反映したかについて若干の用例を取り上げ概観した。これらの考察を通して、両語における西欧語の影響を見ることが出来た。要点を

纏めると、次の通りである。

近代日本語の特色としてよく挙げられるものに言文一致と欧文脈とがある。言文一致と欧文脈とはともに西欧語の翻訳に起因する。

日本語の場合、最初の言文一致文章は二葉亭の『浮雲』(1887)に見られるが、整った形式を持たず紅葉の『多情多恨』(1896)等の第二の言文一致期を経て、鷗外の『布団』(1911)等の反自然主義の小説の出現によって確立される。

一方、韓国語の場合、最初の言文一致文章は1896年の「獨立新聞」に見られるが、「獨立新聞」の廃刊により、言文一致は長く続かなかった。その後1917年に日本留学経験を持つ李光洙の『無情』に改めて用いられ、金東仁等、1920、30年代の作家の作品を通して言文一致が完成される。

このように、日・韓両語における言文一致運動は、出自は多少異なっているが、西欧語の影響で、前近代的なものを避けて、新しい時代に即した言語で平易な表現をしようという文章改良がきっかけになっている点は共通している。但し、韓国語の場合、英語の影響が言文一致の端緒となり、後に、日本語の影響によって完成した点が異なる。

次に、欧文脈の場合、代名詞の多用、無情物及び抽象名詞の主語化、比喩表現の発達、接続語の増加、文章符号の確立等、その要素は、日・韓両語において概ね同じであるが、流入経路は、日本語が西欧語から直接的に受け入れているのに対し、韓国語の場合は、日本語を通して間接的に入っているため、西欧語だけでなく日本語の影響が加わったという点において異なっている。

<引用文献>

<日本語文献>

江湖山恒明(1964)「欧文脈」『講座現代語2 現代語の成立』明治書院

- 木坂 基(1988)『近代文章成立の諸相』和泉書院  
——(1992)「近代日本語の成立—近代日本語文章の成立を中心に」『日本語学』永尾章曹編著 和泉書院  
時枝誠記(1950)『日本文法口語遍』岩波書店  
森岡健二(1991)『近代語の成立・文体編』明治書院  
山本正秀(1965)『近代文体發生の史的研究』岩波書店

<韓國語文献>

- 김 윤식외30人(1996)『한국현대문학사』현대문학  
김 정식(1978)「외래어(외국어)의 사용과 그 고쳐 씀에 관한 실태—서구어를 중심으로」『연구 어문학 교육』1 부산국어교육학회  
金 政右(1994)『翻譯文體의 歷史的研究』國立國語研究院  
宋 敏(1989)「開化期新文明語彙의 成立過程」『語文學論叢』8 國民大學校語文學研究所  
이 오덕(1990)「우리소설에 나타난 남의나라 말과 말법」『국어생활』23

